月刊みんぱく

2022年
6月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和4年6月1日発行 第46巻第6号通巻第537号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

特集 アイヌ民族と「共生」

近年のアイヌ民族をめぐる動き　齋藤 玲子

アイヌ法制の特徴と展開　常本 照樹

アイヌ語復興活動にたずさわって　関根 健司

「北海道一五〇年」をアイヌとして迎えること　石原 真衣

月刊みんぱく
2022年
6月号

目次

1 エッセイ　千字文
「ひと」考
溝口 尚美

特集
アイヌ民族と「共生」

2 **近年のアイヌ民族をめぐる動き**
齋藤 玲子

4 **アイヌ法制の特徴と展開**
常本 照樹

6 **アイヌ語復興活動にたずさわって**
関根 健司

8 **「北海道150年」を アイヌとして迎えること**
石原 真衣

10 みんぱく回遊
北アメリカ北西海岸地域の トーテムポール
岸上 伸啓

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
南米で働く カトリック司祭との思い出
金子 亜美

16 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
ココヤシ葉の七変化
印東 道子

18 シネ倶楽部 M
時を越えて語り継がれる砂漠の物語 ――「スウィート・カントリー」
平野 智佳子

20 ことばの迷い道
どう書く？ ウパシ、upas、うぱし、ウパs
志賀 雪湖

21 編集後記・次号の予告

表紙
木彫《アイデンティティ3》（部分）
制作：貝澤徹（北海道平取町二風谷在住）、2015年
作品前面（右）のジッパーの奥は、内にあるアイヌ民族としてのアイデンティティを表現している。上には男性の手仕事であるイタ（木彫盆）の、下には女性の手仕事である木綿衣の刺繍の文様が彫られている。背面（左）は同じ木綿衣の文様（H0277688）

エッセイ 千字文

「ひと」考

溝口 尚美（みぞぐち なおみ）

北海道平取町（びらとりちょう）で撮影したアイヌ民族のドキュメンタリー映画の製作中、一番悩んだ事はメインタイトルだったが、ある日、シャンプーをしている時に突然降りてきた。タイトルは「A·i·n·u ひと」。「アイヌ」がアイヌ語で人間を意味する事を知っている人は多くないし、主人公は四人のエカシ（アイヌ語でおじいさん）とフチ（アイヌ語でおばあさん）。これだ！と即決した。

思えば北・南米の先住民族と活動した中で、様々な民族名の多くが、その民族の言葉で「人間」を意味すると聞いて印象に残っていた。地球の反対に位置する違う大陸で、民族の名前が同じ意味をもち、森羅万象についての世界観、スピリットやカムイ（神）の存在意義、祈りの作法など、共通点があることに気づいたのは面白い経験だった。

新型コロナウイルスが発生して僅か二年で、世界の五パーセントを超える人が病にかかり、多くの命が失われた。目に見えないウイルスに人間社会は翻弄され、人は直接会う事を避けるようになり、いわゆる「人種差別」が酷（ひど）くなった。私が住むニューヨーク市は世界の様々な国の人たちが混然と暮らす、カラフルで文化の違いを楽しむ街だったのに、それが一変した。当時の大統領が公然と「チャイナウイルス」と言い放ち、アジア人への暴行事件が増えた。一七年暮らして初めて、自分も襲われるのではないかという身の危険を感じ、それは現在も続いている。一方、コロナ禍でブラック・ライブズ・マターという黒人差別に反対する運動が起こり、異なる背景をもつ多様な人びとが一丸となって参加した事も忘れてはならない。

自らを「人間」として見るとき、その他は「山」「川」「虫」等々で、民族も性別も関係ない。その人間同士で争いや傷つけ合いが起こってしまう。コロンビアのナサ民族は、霊山が五〇〇年ぶりに噴火した時、鉱物や土地を奪い合う人間に対して怒った山が、警告を送っていると考えていた。火砕流で死者が出て、鉱物もその下に埋もれた。

気候変動やパンデミックは紀元前から何度も起こっているが、人間は生き延びた。今、起こっている事を警告と取って、どんな行動を取るかは人間次第。豊かな文明を創造してきた人間。この度のパンデミックでも、ワクチンを短期間で開発し、命を繋（つな）ぎ止めた。そんな「人間＝ひと」の一員として、日々の雑多な事は忘れて、時には大きな視点で世界を眺めてみようと思う今日この頃だ。

プロフィール
兵庫県出身、アメリカ在住の映像作家。1995年よりフリーランスで、テレビから映画まで様々な分野の映像制作に携わる。2008年にアメリカでNPOを共同設立、先住民コミュニティに機材を提供して映像の制作方法を指導し、協働制作する活動を6年間行う。日米の商業メディア（鳥の目）と市民メディア（虫の目）を自由に往来しながら制作活動を継続中。

特集

アイヌ民族と「共生」

近年のアイヌ民族をめぐる動き

齋藤 玲子
民博 人類文明誌研究部

一八九九（明治三二）年に北海道旧土人保護法が制定されてから二〇〇年、二〇一九年にアイヌ施策推進法が施行された。日本政府はアイヌ民族に対し、保護という名の同化政策から、その文化の振興と国民への普及啓発を経て、民族としての誇りが尊重される社会の実現を図るとした。それは、アイヌ民族はもとより、多様な人びとが尊重し合い共生する社会という。

アイヌ民族に関する大きな出来事が続いている。二〇一九年の「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（通称：アイヌ施策推進法）の施行、二〇年の民族共生象徴空間（愛称：ウポポイ）の一般公開、そして、二一年の東京オリンピックでの舞踊披露などだ。また、アイヌ民族が登場する漫画や小説も話題となった。それにともない、新聞やテレビでの報道も増え、アイヌ民族とその文化や歴史への関心が高まっていることは、歓迎している。

しかし、記事や番組で取り上げられる歴史は概説にとどまり、見栄えのする文化やそれに携わる人びとがクローズアップされがちだ。アイヌ民族は多様で、その関係者もまた同様であるのに、我々にはその一部の声しか届いていないのではないだろうか。

目に見えるものと博物館

去る二月に、本館、アイヌの文化展示場の一部、「工芸」コーナーの展示替えをおこなった。ここでは、今の生活スタイルに合った工芸品やあらたなアート作品を、作者による解説動画とともに展示することで、文化の継承と創造について紹介している。

現代のアイヌ文化を代表するのは工芸品ばかりではないが、展示では「もの」中心になってしまう。音楽や言語といった無形文化、権利回復運動などについてもパネルや動画で紹介しているものの、伝えきれない現状がある。それをイベントで補えればと考え、講話をはじめ、音楽や人形劇の公演、映画会、ものづくりワークショップなどいろいろと実施してきた。この『月刊みんぱく』のように、出版物でも、展示しづらい目に見えないものや、アイヌ民族と関係者らの率直な意見を、活字で届け、残すことができればと思う。

インターネットの功罪

実物の資料・作品を見せる博物館や美術館は、ある意味でインターネットと正反対のものといえるかもしれない。もっとも、新型コロナウイルスの感染拡大により、休館や入場制限をしなければならないなか、博物館・美術館ではインターネットで利用可能なコンテンツづくりに力を入れている。

アイヌ文化に関するデジタル・コンテンツが充実しているのは、公益財団法人アイヌ民族文化財団だ。以前からアイヌ語や工芸・芸能・儀式などの動画を制作・公開してきたが、最近は若手職員らによる動画でのアイヌ語講座などがいっそう増えている。

オンラインでのイベントも増えている。北海道で開催されるアイヌ文化関連の講座などに、大阪から受講できるようになったのはありがたい。しかし、過日、参加したイベントは、配信中に複数のアカウントから画面を乗っ取られ、中止を余儀なくされた。後日、イベントの動画は配信されたものの、主催者・参加者の気持ちを思うと、胸が痛む。

こうした直接的な攻撃はそう多くないと思いたいが、ニュースサイトのコメント欄などでのことばの暴力はあまりにも多い。アイヌ施策推進法では、差別や権利利益の侵害を禁じているものの、現実には減るどころか増えているように感じる。ネット上の誹謗中傷は社会問題になっており、アイヌ民族に向けられたものに限らない。インターネットをどう使うか、使わないか、世間の動向を見ながら、ともに考えていきたい。

アイヌの文化展示場の「民族の復権をめざして」（右）と「世界をひろげる」（左）の展示

「アイヌ工芸 in みんぱく」での刺繍体験。講師は公益社団法人北海道アイヌ協会認定・優秀工芸師の岡田育子さん（2019年）

2022年2月に展示替えをしたアイヌの文化展示場の「工芸」コーナー（一部）

共生社会の実現とは

アイヌ施策推進法の制定経緯や課題については、法学者の常本照樹氏に寄稿いただいた。筆者は法律には素人ながら、同法がその名称のとおり、アイヌ民族だけではなく、社会全体について定めたものという点が重要だと思う。同法には、「全ての国民が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを目的とする」とある。そして、「アイヌ施策の推進」は「多様な民族の共生及び多様な文化の発展」への国民の理解を深めるためにおこなわれなければならない、とする。

よく男女共同参画社会の実現には、女性が頑張るのではなく、男性が理解し、男女がともに活動しやすい社会のしくみを整えることが必要だとされる。同様に、「共生」のためには、少数者や弱い立場の人が奮闘するのではなく、多数者や力をもつ側が理解することが肝要だろう。

今回、寄稿いただいた関根健司氏は関西出身、アイヌ民族の真紀さんと結婚し、平取町に移住した。そこから勉強を重ね、アイヌ語を身につけた。アイヌと屯田兵のルーツをもつ石原真衣氏は、社会人を経て大学院に進み、自身の存在の歴史化を追究し、現代アイヌ民族の複雑さを著した編著書がある。本特集が、多角的な視点で「民族共生」を考える端緒となることを願っている。

アイヌ法制の特徴と展開

常本 照樹（つねもと てるき）
北海道大学名誉教授

アイヌ文化振興法まで

日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であるアイヌは、明治期以降、欧米列強に対抗して近代国家を目指す日本のなかで、独自の文化に深刻な打撃を受け、生活は困窮した。政府は一八九九年に北海道旧土人保護法を制定し、農業を奨励することなどで彼らの生活の立て直しを図ったが、その後、世界の先住民族運動の影響もあり、一九九七年にアイヌ文化振興法を制定して民族文化の復興に力点を置くようになった。

振興法は生活向上や権利保障を求めるアイヌの要望からは遠いという指摘を受けることもあったが、同法が施策対象を音楽、舞踊、工芸などの狭義の文化に絞った理由としては、アイヌ語がユネスコによって消滅危機言語に指定されたように、アイヌ文化が存立の危機にあり、一刻も早く振興を図る必要があったことがあげられる。もうひとつは、一九九五年に内閣官房長官が設置し、振興法の基調を定めた「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」の報告書が指摘するように、生活向上施策などには対象者の認定方法など課題が多く、解決の目処（めど）が立たないことなどの事情があると思われる。

アイヌ施策推進法の構造

二〇〇七年の「先住民族の権利に関する国際連合宣言」採択をひとつの契機として、政府は翌年六月に「アイヌ民族が先住民族であるとの認識」に基づいて総合的政策を展開するとの内閣官房長官談話を発表した。そして、この認識を法律として初めて表明するとともに、アイヌの人びとの誇りが尊重される社会と、すべての国民が人格・個性を尊重し合いながら共生する社会を実現することを立法目的として、二〇一九年にアイヌ施策推進法を制定した。その目的を達成するため、同法は、差別を禁止するとともに国民の理解を深めるための教育・広報等をおこなうこと、そして、従来の文化振興や福祉施策に加え、地域振興、産業振興、観光振興等を含む総合的なアイヌ施策を推進することとし、国が市町村の事業費の八割以上を負担するという異例の交付金制度を創設した。

アイヌ政策推進交付金として年間約二〇億円が措置されており、市町村がアイヌの人びとの意見、要望を聴きつつ事業計画を作成する。事業としては、伝統的なアイヌ文化・生活の場の再生支援、木工芸品等の材料供給システムの整備、アイヌ文化のブランド化推進、アイヌ文化関連の観光プロモーションなどの観光振興、地域住民のためのバス運行、アイヌと地域住民の交流の場の整備、アイヌ高齢者のコミュニティ活動の支援、地域の子どもの学習支援などさまざまなものが想定されている。

さらに、アイヌおよびアイヌ文化への国民理解の促進と、アイヌ文化復興のためには、その拠点として国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園および慰霊施設から構成される民族共生象徴空間「ウポポイ」（アイヌ語で「大勢で歌うこと」）が北海道白老（しらおい）町に設置され、国土交通省および文化庁の委託を受けて公益財団法人アイヌ民族文化財団が運営を担っている。同財団は、その他にも、各地でのアイヌ文化の伝承・創造の支援や全国を対象とした普及啓発活動を展開している。

具体の民族に適合した施策を

アイヌ施策推進法の特徴は、対象者の認定など先住権保障の前提条件が整っていないという現実を踏まえ、音楽、舞踊、工芸などに生活様式なども加えた広義のアイヌ文化の復興等およびそのための「環境の整備」を目指す各種の施策を、そしてそれらの施策を支えるための交付金制度を採用したところにある。

思うに、アイヌ政策を考えるに当たっては、アイヌと日本の実状を踏まえて、アイデンティティを共有する人びとの集団としての民族の基盤たる文化の復興を基本とするとともに、人びとの具体的ニーズを適切に把握し、政策による得失を現実的かつ慎重に、次世代への影響をも含めて、判断することが必要であるように思われる。政策目的はあくまでもアイヌという具体の民族の福利であり、先住民族であることはその目的を達成するための手段として意味をもつと考えるべきであろう。

推進法は、山なす課題を乗り越え、アイヌ民族の復興を図り、アイヌ文化を推重する人びとを支援するための現実的なしくみを実現したものとみることができよう。

盛況のアイヌ文化フェスティバル（アイヌ民族文化財団主催、群馬県高崎市、2021年）

アイヌ民族文化財団が設置した札幌駅アイヌ文化情報発信コーナー（2021年）

上：新千歳空港と平取・白老町を結ぶ、アイヌ文化拠点交通促進バス「セタプクサ号」。2020年の車両デザインは関根真紀氏と貝澤徹氏（提供：札幌観光バス株式会社）

左：首都圏以北初の国立博物館でもある国立アイヌ民族博物館（提供：アイヌ民族文化財団）

アイヌ語復興活動にたずさわって

関根健司（せきねけんじ）
平取町教育委員会アイヌ文化学習係長

ニュージーランドのマオリ語学校を訪問。右から2人目が筆者（撮影：井口康弘、2013年）

わたしはアイヌ民族の人口比率がもっとも高い北海道日高地方、平取町の役場職員という立場で、アイヌ語、アイヌ文化の普及活動を生業としている。おもな業務は、町内の小中高校を訪れ、各学年で年間数時間ずつ計画されているアイヌ文化学習で講師を担当することであり、工芸や料理体験学習の場合は地元講師を手配し、そこで助手を担当することである。特筆すべきは、町立二風谷（にぶたに）小学校でアイヌ語学習（全学年とも年間一〇回）を八年間おこなってきたことであろう。このようにアイヌ語学習に力を入れる学校は同小学校以外にはない。しかしこれも、ある程度学校に裁量の余地がある総合学習の時間をおもに利用しているものであり、アイヌ語学習がしっかりとカリキュラムに組み込まれている、といえるような状況ではない。

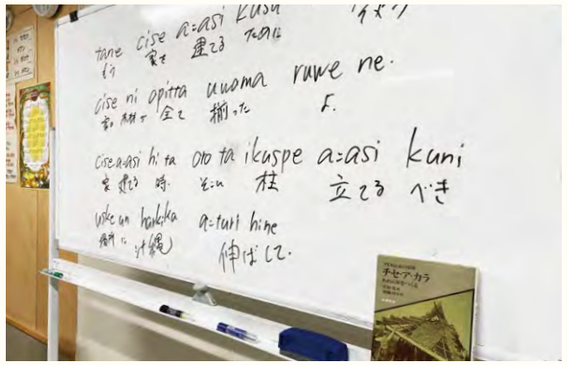
学校の活動以外では、週二回、二風谷アイヌ語教室子どもの部（夕方二時間半、アイヌ語の歌、紙芝居、早口ことば、カルタ、伝統舞踊などをおこなう）の講師を一五年ほど担当している。さらに、成人を対象とした、週二回の対面でのテ・アタアランギ、週一回のオンラインでのテ・アタアランギ、週一回のオンラインでのアイヌ語会話会などを主宰している。

話して身につける

テ・アタアランギとはニュージーランドでマオリ語復興運動において確立された言語学習法で、学習時は一切他の言語を使わない。あらたに習ったことばを直後に自分でも喋（しゃべ）り、コミュニケーションを図るという会話重視の学習法で、話者育成に絶大な効果を発揮している。二〇一三年、わたしは初めてニュージーランドを訪問したときに習い、それ以後、二風谷において、アイヌ語話者を増やす目的で実践してきた。現在おこなっている対面でのテ・アタアランギグループは三つ目といえるが、やっと上手くいきだした、という実感がある。ここでは簡単なアイヌ語会話を毎回一時間半、楽しみながら続けることができるようになってきている。誰にとっても日本語で喋る方が簡単なので、安心して間違うことができる空間を作ること、そしてアイヌ語だけでコミュニケーションを図ろうとする姿勢を称賛することが重要である。この学習法は、大人に関してはある程度成果が出てきているが、子どもには向かないことも実感している。ある時間内、使用する言語を縛るというのは子どもにとっては苦手なようだ。

子どもにとっていちばん効果的な学習法は、すべてのことをその目的言語でおこなう、イマージョン（没入法）タイプであろう。ニュージーランドには、すべてをマオリ語でおこなう幼稚園（保育園）や学校が数多くあり、子どもたちは、そこに通うことで簡単にマオリ語と英語のバイリンガルに成長している。よって、わたし自身の最大の目標はそのような幼稚園、学校を作ることだといえる。

二風谷小学校では2015年にアイヌ語学習が始まった
（提供：平取町教育委員会）



アイヌ語の書籍『アイヌ民家の復原　チセ・ア・カラ――われら家をつくる』（萱野茂著、須藤功写真、未来社、1976年）を読み解く勉強会での板書（2022年）

アイヌ語で身体名称を覚えるためのボード
（撮影：稲野彰子、二風谷生活館、2017年）

2014年、二風谷にてアイヌ語テ・アタアランギの実践を始めた

アイヌ語の未来に向けて

しかし、現在のアイヌ語の状況を見ると問題が山積している。アイヌ民族自身やそれ以外の人の意識、アイヌ語の地位をいかに高めていけるか、法律や制度をどのように変えていけるか、賛同してくれる人をいかに増やせるか。わたしは根本では、国全体で歴史観を見直し、国がアイヌに対しておこなった侵略、略奪、同化政策等について謝罪し、アイヌ語、アイヌ文化の復興に責任をもつ（今よりも大量に予算を投入する）ことが必要だと思う。しかし、それらのことは、ただ待っているだけでは実現しないだろう。アイヌ側も訴え続けて、いろいろな権利を勝ち取っていく必要があると思う。

今は二風谷のアイヌ民族にとっても、アイヌ語を喋れないことは恥ずかしいことではない。アイヌ語が喋れなくても、木彫りができる、刺繍（ししゅう）ができる、伝統舞踊をやっているとなれば、胸を張ってアイヌ文化を伝承しているといえる。しかし将来的には、アイヌであってもそうでなくてもアイヌ語の話者が増えることを願っている。

白老町の民族共生象徴空間（ウポポイ）ではアイヌ語を第一言語と掲げており、二風谷においても、二風谷アイヌ文化博物館内やチセ（伝統的家屋）群などでアイヌ語表記等が進んでいる。これら施設には、子どものころにアイヌ語教室で学んだ若者たちも勤務しており、彼らがさらにアイヌ語を使う機会を広めていってくれることを期待している。

「北海道一五〇年」をアイヌとして迎えること

石原真衣
北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

二〇一八年は、国をあげて関連施策が実施された「明治一五〇年」の年で、北海道でも「北海道一五〇年」がかかげられた。行政をはじめ、祝福ムードのなか、「わたし」は先祖たちや、アイヌの出自をもちながら沈黙する「サイレント・アイヌ」の痛み、傷が見えなくなっていると感じ、苦しかった。このような想いに心を寄せてくれたのは、北海道や日本の大学、研究機関や研究者ではなく、カナダのブリティッシュコロンビア大学とそこにつながる研究者たちだった。同大学で二〇一九年三月一四～一五日に開催された「北海道一五〇年――近現代日本と世界における殖民・植民地主義と先住民性」というイベントには、『アイヌからみた北海道一五〇年』（石原真衣編著、北海道大学出版会、二〇二一年）に寄稿いただいたアーティストのマユンキキ（八谷麻衣）さん、国立アイヌ民族博物館の学芸主査である八幡巴絵さんとともに、わたしも招聘された。アイヌにとって、「北海道一五〇年」とはどのような時だったのかということをサイレント・アイヌ当事者の視点から述べた。

どの世界に存在するのか

同じ時期、アイヌの出自をもつ人びとのさまざまな想いを本にしようとわたしは奮闘していた。わたしにとってもっとも困難だったのは、自分の当事者性の問題だった。アイヌの出自と琴似屯田兵（会津藩出身で、開拓のリーダー的存在）の出自をもち、「自分をアイヌとも和人とも思えない」という特殊なわたしの当事者性は、アイヌ社会でも和人社会でもわたしを異質で場違いな存在にした。トランスジェンダーの人びとやインターセックス（日本では当事者団体によって「正式名称はDSD」とされている）の人びとが、「男／女」という二元論的世界において常にどちらなのか問われ、説明させられ、排除や包摂の対象となるように、わたしもまた「アイヌ／和人」の二元論的世界においてことばや存在が殺され続けていた。どちらかのアイデンティティによって生きることを強制されたが、日本に固有のレイシズムはアイヌの血を引く人間を和人には分類しない。いずれの世界に存在するにせよ、暴力的に自己の身体や歴史性を切り刻むか、沈黙をしなければいけなかった。

『シヌイェから見るアイヌの生活2』の聞き取り調査の際にシヌイェをペイントするマユンキキさん
シヌイェとは入れ墨を意味するアイヌ語である。かつて入れ墨をすることは、アイヌ女性にとっての成人儀礼であったともいわれている。現在シヌイェを施しているアイヌ女性がほとんどいないなかで、マユンキキさんはシヌイェをしていた世代を実際に見ていた人たちに聞き取りをおこない、当時のコタンの様子や、人びとのかかわり、シヌイェの伝統的な施し方から、すでに本来の意味合いが失われつつあるシヌイェをアイヌ自身の印象や記憶から汲み取っている
（撮影：池田宏、北海道、2019年、解説：八谷麻衣、石原真衣）

2021年に札幌で開催された個展「SINRIT シンリッ」のフライヤー（表）

筆者著『〈沈黙〉の自伝的民族誌――サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』
（北海道大学出版会、2020年刊、第38回大平正芳記念賞受賞）

囲炉裏の前の門野（もんの）ハウトムテイ、トサ夫妻（八谷麻衣さんの曾祖父母）

コグマの世話をする門野トサ

この2枚は観光用に撮られたもので、当時（昭和中期）の生活をあらわすものではない。今を生きているアイヌの多くは世代間において「アイヌであること」の伝承が極めて困難な状況を生きてきた。この2枚の写真のように見るものを喜ばせるようなアイヌの写真は当時の貴重な資料であると同時に、少なくない当事者にとっては居心地の悪いものでもあるが、その事実は多くの和人には気づきにくいことなのかもしれない（提供：八谷麻衣、解説：八谷麻衣、石原真衣）

アイヌの声を届ける

拙著『〈沈黙〉の自伝的民族誌――サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』（北海道大学出版会、二〇二〇年）を刊行して以降、アイヌ・和人双方の読者は、このようなわたしの身体経験を追体験し、「わたし」という存在が北海道におけるポストコロニアルのひとつの帰結なのだと了承してくれるようになった。ようやく「わたし」は安心して、アイヌの歴史に子孫として接続することが可能になった。「北海道一五〇年」という時は、わたしを含め多くのアイヌの子孫にとって、混血を繰り返し、歴史や文化や死者たちを棄て去り、先祖や同胞に接続することを困難にした時間だった。

マユンキキさんは、自身の個展「SINRIT シンリッ――アイヌ女性のルーツを探る出発展」のなかで、「ウポポイ（民族共生象徴空間）の開館で今まで以上にアイヌへの注目が集まる中、多くの方のアイヌに対するイメージは、偏った情報や限られた時代の印象から生み出されてしまっていることを痛感しています。そしてそれは、今世界中で求められている『多様性』には遠く及ばない非常に難しい状況を生み出し、私を取り巻いているように感じています」と述べた。

『アイヌからみた北海道一五〇年』に三三名のアイヌおよびアイヌの子孫たちが寄稿した。本書はまるで相互にかみ合わない異質な声によって編まれているが、それは「アイヌが多様である」とか「アイヌはバラバラである」とかいった状態をあらわしているのではない。この本には一五〇年かけて生まれたさまざまな痛みや傷、そしてそのなかで自ら紡いできた物語や希望がアイヌ自身によって刻まれている。アイヌの声が一様ではないことは、それほどまでに徹底的に物理的なコミュニティが崩壊させられ、一人ひとりが主流社会で生きざるをえなかったことの帰結である。アイヌ近現代思想史の研究者であるマーク・ウィンチェスターが「日本の歴史上の最大の人種差別主義事件」と称したアイヌ遺骨問題の当事者から、次世代の文化振興を担う若手世代まで、混沌としたアイヌの声はアイヌのための未来が拓かれるための序章である。

みんぱく回遊

北アメリカ北西海岸地域のトーテムポール

岸上伸啓（きしがみ のぶひろ）
民博 学術資源研究開発センター

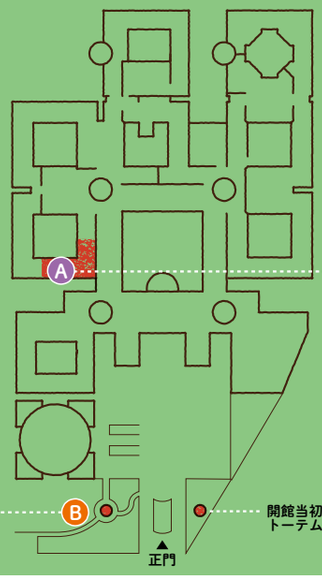
民博を訪れると世界各地のさまざまなめずらしいモノをまぢかに見ることができる。そのなかでもひと際、目を引くもののひとつが北アメリカ北西海岸地域のトーテムポールではないだろうか。

トーテムポール（以下、ポール）とは、レッド・シダーの巨木を加工した木柱に動物や人間の姿形（すがたかたち）を彫り込んだものである。もともとは家族の歴史や出来事を記録に残すためや、死者の功績をたたえるためなどの理由で制作された。現在では民族アートとなっているが、北アメリカ北西海岸先住民の経済的繁栄、国家による同化、文化復興といった彼らの歴史的体験と深く関係している。

トーテムポール秘史

一八世紀後半に北西海岸地域の村をはじめて訪れたヨーロッパ人の記録には、屋外のポールらしきものへの言及はない。一方、一九世紀末の写真には、巨大なポールが林立している。じつは、野外のポールの巨大化や制作数の増加は、一八世紀末から一九世紀初頭にかけてヨーロッパ人とのあいだでおこなわれたラッコ皮などの交易の所産であった。同地域の人びとは、この交易によって鉄器やビーズなどを手に入れると、結婚式や葬式、子どもの命名式のような特別な機会に多数の客を招き、饗応（きょうおう）するとともに、貴重なモノを贈与する盛大なポトラッチ儀礼をより頻繁に開催し、巨大なポールを制作するようになった。

Ⓐ リチャード・ハント作の墓標の一部。クマがアザラシを抱えている（カナダ、H0009194）



Hからはじまる番号は標本番号です。

ところがヨーロッパ人入植者が増えカナダ国家が成立すると、政府は一八八五年から一九五一年まで、伝統宗教に結びつく非文明的なものとしてポトラッチ儀礼を禁止した。その後、一九五〇年代から先住民に宗教の自由が認められると、儀礼やポール制作は再開し文化復興活動が始まった。一九七〇年代は「インディアン・ルネッサンス」とよばれ、ポールは文化復興のシンボルのひとつとなった。

前庭のトーテムポール

正門から民博本館に向かって右側と左側には、ふたつの巨大なトーテムポールが向かい合って立っている。右側にあるポールは、一九七七年にクワクワカワクゥ民族のリチャードとトニーのハント兄弟が制作した。上からサンダーバード（空想上の怪鳥）、シャチ、棒をくわえたビーバー、ワタリガラスが彫られている。当初、鮮やかに着色されていた赤・黒・緑は、約四〇年を経て退色した。また、二〇一八年夏の台風によって、サンダーバードの羽が破損したため、羽は取り除いたままの状態にある。

左側にあるポールは、同じ民族のビル・ヘンダーソンが民博創設五〇周年記念の事業のひとつとして二〇二〇年一月に完成させた新しいものである。上からワシ、三つの頭をもつシシウトル（空想上の大ウミヘビ）、ハイイログマ、サケが彫られている。右側のポールとの大きな違いは、着色後にニスを上塗りしており、水をはじくことと、固定の仕方が異なることである。本来はポールの下部（四分の一程度）を土中に埋めて固定するが、このポールはコンクリート製の台座の上に金具で浮かせて固定している。このためポールの土台部が腐りにくく、従来に比べてより長期にわたり原形をとどめることができる。

屋内のトーテムポール

アメリカ展示場には、三本のポールがある。向かって左のポールは、ニスガ民族のノーマン・テイトが制作した赤と黒の二色塗りで、上からカエルをもった巨人、ワタリガラスが彫られている。中央は、リチャード・ハントが制作した、首長の死を記念して立てる墓柱である。赤、黒、青、緑の四色塗りで、上からワタリガラス、アザラシをもったクマが彫られている。右側はトニー・ハントが作った無着色のポールで、神話に登場する子グマ、親グマ、オヒョウをモチーフとしている。

伝統文化の創造的継承

文化復興期の一九七七年に制作された四本のポール、そしてそれから約四〇年後に制作された一本のポール。固定方法に違いはあるが、これらを見ていると少なくともこの半世紀のあいだに、伝統文化が復興され、受け継がれていることを肌で感じることができる。彼らは過去の制作技法を受け継ぎながらも新たな要素を付け加え、文化伝統を創造的に継承してきたということができるだろう。次の世代の人びとはどのようなポールを作るのだろうか。想像するだけでもわくわくしてしまう。

Ⓑ 民博の新しいトーテムポール（カナダ、H0326487）

民博の新トーテムポールの制作作業。キャンベル・リバーのビル・ヘンダーソン工房にて（撮影：ウィル・ヘンダーソン、カナダ、2020年1月23日）

前庭に新トーテムポールが立ち上げられた（2020年6月24日）

INFORMATION みんぱく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event

企画展

「焼畑――佐々木高明の見た五木村、そして世界へ」

日本や世界の焼畑を事例にして、現代社会と焼畑とのかかわり、日本文化のなかでの焼畑のもつ意義について紹介します。

会期　6月7日(火)まで
会場　本館企画展示場

コレクション展示

「現代中国を、カワウと生きる――鵜飼い漁師たちの技」

鵜を利用して魚を捕る鵜飼。生業として続く中国の鵜飼を、めずらしい鵜飼い船や本館の卯田宗平が撮影した写真、動画とともに紹介します。

会期　6月30日(木)～8月2日(火)
会場　本館企画展示場の一部

研究公演

「伝承する人びと――北インド古典音楽の世界」

日時　6月11日(土)13時30分～15時50分(13時開場)
解説　岡田恵美(本館 准教授)
参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員130名)
※要事前申込(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
②オンライン(ライブ配信)
※申込不要、当日みんぱくホームページより自由視聴可能。

【申込期間】
■一般受付
6月3日(金)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

漁が終了し、カワウを止まり木に戻す漁師(江西省鄱陽湖)

みんぱく映画会

第51回みんぱくワールド・シネマ「はじまりへの旅」

資本主義を否定する父親のもと、森に隠棲し英才教育をほどこされてきたキャッシュ家の子どもたち。外界との接触で、一家はそれぞれの生き方を見つめ直します。

日時　7月9日(土)13時30分～16時30分(13時開場)
解説　深海菊絵(日本学術振興会 特別研究員)
司会　菅瀬晶子(本館 准教授)
参加形式
会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員200名)
※要事前申込(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
6月3日(金)まで
定員40名

【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
6月6日(月)～7月1日(金)

その他のイベント

「音楽の祭日2022 in みんぱく」

日時　6月26日(日)
10時30分～16時30分
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)
※要事前申込(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(展示をご覧になる方は、展示観覧券が必要です)
※本イベントは3部制です(各部定員100名)。予約は各部ごとに受付。
②オンライン(ライブ配信)
※申込不要、当日みんぱくホームページより自由視聴可能。

お問い合わせ先
企画課「音楽の祭日」担当
電話 06-6878-8532
(土日祝を除く10時～16時)

巡回展

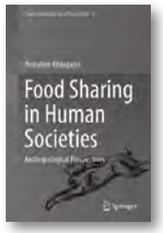
「驚異と怪異――世界の幻獣と霊獣たち」

みんぱくの資料を中心に高知県独自の資料も加え、龍、怪鳥、巨人など世界各地の人びとが創り出してきた不思議な生きものたちを紹介して、人間の想像力の面白さに迫ります。

会期　6月26日(日)まで
会場　高知県立歴史民俗資料館
主催　高知県立歴史民俗資料館(公益財団法人高知県文化財団)
国立民族学博物館
公益財団法人千里文化財団
KUTVテレビ高知

刊行物紹介

■岸上伸啓 著
"Food Sharing in Human Societies: Anthropological Perspectives"
Springer
※価格については販売元でご確認ください。



分配や交換という行動は人類の特徴のひとつである。本書は、北アメリカ極北地域の狩猟民の食物分配を事例として、研究史をふまえつつ他の狩猟採集民社会と比較しながら、人類の食物分配とは何かを検討した著作である。

■野澤豊一・川瀬慈 編著
『音楽の未明からの思考――ミュージッキングを超えて』
アルテスパブリッシング　3,300円(税込)

文化人類学、映像人類学、民族音楽学、ポピュラー音楽研究、音楽教育学などの研究者16名が、世界各地でのフィールドワークに基づき、音楽という概念を解体し、音楽の未明とでも呼びうる地平から思考を試みる。

みんぱくゼミナール

参加形式
会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員200名)
・要事前申込、先着順、参加無料
・当日参加受付あり(定員40名)

第522回
6月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
フランスのモン難民から考えるグローバル化
講師　中川理(本館 准教授)

大規模な人や資本の移動をとおして、これまで遠くにいた他者が隣人になり、異なる人びとがよりいっそう社会的・経済的につながり合うようになっています。この状況をどう理解すればよいのか、フランスに住むモン難民の事例から考えます。

【申込期間】
■一般受付
6月15日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第523回
7月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
鵜と人間――ウミウ産卵の謎解きから
講師　卯田宗平(本館 准教授)

1300年の歴史をもつ日本の鵜飼において、2014年5月にめずらしい出来事が起こりました。鵜が産卵したのです。なぜこれがめずらしいのか。ウミウ産卵の謎を解きながら日本の動物利用の特徴を紹介します。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
6月13日(月)～17日(金)
定員40名
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
6月20日(月)～7月13日(水)

人工孵化で誕生したウミウ(2014年)

※6月開催予定のみんぱくウィークエンド・サロンはありません。

刊行物紹介

■韓敏 著
『記憶と象徴としての毛沢東――民衆のまなざしから』
臨川書店　4,400円(税込)

ナショナル・シンボルとしての毛沢東は、どのように社会に浸透し、民衆に受容されてきたのか。中華民国の孫文とベトナムのホーチミンとを比較しながら、毛沢東の象徴的意味、個人崇拝の生成過程と持続するメカニズムを究明する。

■小野林太郎、Alfred Pawlik 編集
"Pleistocene Archaeology――Migration, Technology, and Adaptation"
IntecOpen Publisher　119ポンド(参考価格)

本書は出アフリカに成功した私たちサピエンスが、アジア・アメリカ大陸や東南アジア島嶼域や琉球列島などの島世界へいつ、どのように移住し、各地でどのような適応を行ったのかについて簡潔に整理している。

※デジタル版はオープンアクセス(無料)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

友の会講演会

受付フォームは友の会ホームページ内にあります。
※会員：無料
一般：500円(会場参加のみ)
※要事前申込、先着順

第525回　6月4日(土)13時30分～15時
コサックの国で生まれたユダヤ人の大統領？――ウクライナとロシアにおける民族問題の諸相
講師　赤尾光春(大阪大学 非常勤講師)
参加形式
①本館第5セミナー室(定員40名)
②オンライン(ライブ配信)

2014年の「ユーロ・マイダン革命」とともに民族主義が台頭したウクライナでは今、ユダヤ系の大統領がロシアとの戦いで指揮を執っています。この驚くべき状況はどのようにして生まれ、どのような影響をもたらすのでしょうか。ウクライナとロシア、そしてユダヤ人との歴史的な関係を紐解き、複雑な民族問題の諸相を読み解きます。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/525tomo/

第526回　7月2日(土)13時30分～15時
アボリジニの「酒狩り」
講師　平野智佳子(本館 助教)
参加形式
①本館第5セミナー室(定員40名)
②オンライン(ライブ配信)

酒は楽しい娯楽ですが、トラブルの種にもなります。アボリジニ社会では酒が好まれる一方で、「酒は毒」という語りがきかれます。こうした状況下で人びとはどのように酒を調達しているのでしょうか？　本講演では、オーストラリアの中央砂漠で狩猟の知識を絞りながら酒を探求するアボリジニの「酒狩り」に迫ります。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/526tomo/

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

南米で働く カトリック司祭との思い出

金子（かねこ） 亜美（あみ）
立教大学准教授

集落でミサの後に司祭とおこなわれた慈悲の聖母の行列

チキトス地方とキリスト教

南米大陸のほぼ中心、現在のボリビア東部の低地には、チキトス地方として知られる地域がある。この名は元々、スペイン領植民地の辺境政策として現地住民の集住化とキリスト教化をイエズス会が担ったことで設立された「チキトスのイエズス会布教区」にルーツをもつ。一七世紀末から一八世紀にかけて会は広大な地域に一〇カ所の町を作り布教区とし、住民のキリスト教化を進めた。これらの町は今日ボリビアのサンタ・クルス県を構成する自治体となっている。

わたしはチキトス地方のキリスト教化の歴史と現状を知るために、二〇一四年から二年間、旧布教区のうちのひとつにあたる現サン・イグナシオ・デ・ベラスコ市（以下サン・イグナシオ市）に滞在した。国内でもっとも面積の広い司教区であるサン・イグナシオ・デ・ベラスコ司教区の拠点である大聖堂は、この自治体内にある。この司教区では今日も主日ミサや教会暦のキリスト教行事が住民の公私にわたる社会生活の節目となっており、二〇一四年時点で司教区住民の八九・九パーセントがカトリック教徒だった。当地でわたしがおもにおこなったのは、カビルドとよばれるカトリック行事を司る先住民組織の儀礼活動に同行させてもらうことだったが、ここではそのなかでたびたびかかわる機会のあった聖職者について述べたい。

サン・イグナシオ司教区の聖職者

サン・イグナシオ大聖堂には出身を異にするさまざまな世代の司祭が所属していた。いずれも男性で、カトリック教会から派遣された教区司祭である。わたしの滞在中はドイツ出身の司教が在任中で、彼は約三〇年間この地域の司牧に携わってきた。司教区にはサン・イグナシオ市内だけでも複数の小教区があり、大聖堂周辺以外の小教区は教会から委嘱を受けた諸修道会が担当していた。例えば市西部の小教区はフランシスコ会、東部の小教区は神言会、市から西に二〇キロメートル離れたサン・ハビエリート小教区はイデンテ会が担当していた。いずれの修道会にも特色があり、司祭の祭服や聖堂装飾もさまざまであった。修道司祭も出身や使用言語が多様であり、エルマーナ（シスター）に出会うこともできた。わたしはことあるごとに修道会関係者の世話になった。特に、日本では南山大学の運営で知られる神言会に所属する多国籍の司祭たちはわたしを昼食に招待して雑談に付き合い、市外での典礼活動にしばしば同行させてくれた。

広大な管轄区域をもつこの司教区では、これらの教区司祭や修道司祭が、祝祭日や守護聖人祭のために市外にある小規模な集落を訪問してミサを挙行したり、洗礼や堅信などの秘蹟（ひせき）を授ける責務を負う。今ほど道路整備が進んでいなかったころ、先述の司教は小型飛行機で広大な司教区をめぐっていたというから驚きであった。

司祭とめぐる集落の旅

わたし自身は空の旅に同行する機会はなかったが、町の人びとと一緒に司祭の車に同乗して周辺集落の守護聖者祭をたびたび見に行った。司祭が常駐しない共同体の人びとは年に数度の訪問を喜び、どの集落でも典礼の後には役職者の家や集会所で司祭に食事が振る舞われた。わたしもそこにたびたび同席させてもらい、人びとと司祭の思い出話を聞くことができた。「あれはあの司祭が掘った井戸」、「これは誰々司教が建てた学校」というように、さまざまなものや場所が歴代の司祭の名前とともに記憶されていた。公共事業である取水設備や農地、教育施設、ラジオ放送などのインフラ整備においてカトリック教会がおこなってきた貢献を垣間見ることができた。その一方で、ミサの後に信者のみでおこなうさまざまな儀礼を祭服姿のまま写真に撮る司祭や、信者が典礼の前後で演奏する伝統的な笛を借りて演奏に加わろうとする司祭など、現地の慣習に関心を抱く司祭がいたのも印象的だった。

上：集落での典礼の後、食事に招かれる司祭
下：集落で司祭とわたしに振る舞われた食事

集落の守護聖人祭前夜に洗礼を授ける司祭

司祭が集落をめぐるときの足。集落間を移動する一般信徒もしばしば同乗する（写真はいずれも2014年に撮影）

司祭と一緒に集落をめぐってみました

ココヤシ葉の七変化

印東 道子（いんとう みちこ）
民博 名誉教授

オセアニアのほぼ全域に分布するココヤシは、食用から手工芸用素材、建築材、燃料などに幅広く利用されており、もっとも有用な植物である。なかでも豊富に利用できる葉は、バスケタリーの素材として多用されている。

植え付け用のタロイモを入れた簡易バスケット（ヤップ島、1983年）

その場で編む

ココヤシの葉は、中軸の左右にそれぞれ一〇〇枚をこえる細長い小葉が、ほぼ等間隔に並んだ羽状の構造をしている。小葉はそれぞれがしなやか、かつ堅固に中軸についているため、編み材として優れている。例えば、ごく簡単な使い捨てバスケットを見てみよう。中軸の左側と右側の小葉をそれぞれ平織り状に編んでいき、先端部を編み合わせて閉じると開口部のないバスケットになる。最後に、中軸を縦に割いて開口部にすれば、完成である。太くて丈夫な中軸が上端に当たるため、重いものを入れて運んでもバスケットの形が崩れないのは大きな利点である。タロイモの植え付け用の苗を運ぶときやカヌーで持ち帰った魚を運ぶときなど、その辺にあるココヤシの葉でまたたく間にバスケットを作ってしまう。男でも女でも簡単に作れる。

多機能なバスケット

ミクロネシアのヤップ島の男性は、その身分や年齢に応じたバスケットを脇の下に挟んで持ち歩く。若い男性用のバスケットは小さめで下に装飾がついており、年齢が高くなるにつれて幅の広い大きなバスケットを持つようになる。もちろん使い捨てではなく、数年間は毎日肌身はなさず使用できるほど丈夫に仕上がっている。このように耐久性が求められる場合には、葉を数日間、太陽にさらしてから太さや編み方を工夫してきっちりと仕上げる。

複数の機能をもつバスケットに、ミクロネシアのカロリン諸島で使われた乳児用のバスケットがある。葉を二枚重ねにして両サイドを閉じないように編んだバスケットの底部には、ハイビスカスなどの柔らかい樹皮や、近年ではタオルなどを敷いて、その上に赤ん坊を寝かせる。ショルダー紐がついているので、母親はこのバスケットをそのまま肩から下げてイモ畑に出かけ、作業中は木陰に吊るしておけば程よく揺れる「揺りかご」になる。

男性用バスケット。若い男性用（上）と年配男性用（下）（ングルー環礁、1980年）

乳児用バスケット（ヤップ島、H013 0485）

日本の東北地方でも、ワラを編んで作った「えじこ」や「えんつこ」などとよばれた嬰児籠に赤ん坊を入れていたが、それよりはるかに携帯しやすく機能的である。

多様なバスケット類には、丁寧な作りなのに一回しか使われないものもある。ある年、ヤップ島での発掘調査の最終日に、調査を手伝ってくれた人びとと村で打ち上げをおこなった。そこへ調理された食べ物がきれいなバスケットで運ばれてきた。淡い緑色の若いココヤシの葉を円筒状に編んだバスケットで、民族誌には見られない近年のイノベーションのようだった。柔らかく傷が付きやすい素材なので、この宴のためにあらたに編まれたことは明らかだった。若いココヤシの葉には「清らか、清浄」の意味もあり、もてなしの気持ちがよく伝わってきた。

ココヤシの若葉で編まれたバスケット（ヤップ島、1984年）

屋根材や壁材として

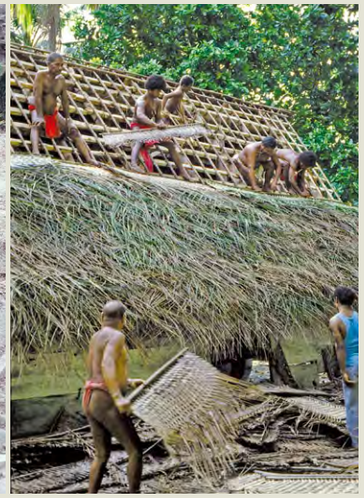
ミクロネシアでは屋根材や壁材としてもココヤシの葉が多用される。同じヤシ科のニッパヤシの方が強度もあり、耐用年数も長いのに比べ、ココヤシは耐用年数が三年ほどと短い。しかしニッパヤシが入手できないサンゴ島では、もっぱらココヤシの葉が使われ、家屋全体もココヤシの葉を編んだシート状の部材で覆われる。

屋根材としての両者の大きな違いは、ニッパヤシは一枚一枚の葉を並べて部材を作るので、葉を編むことはない。これに対してココヤシの場合は、葉の長さの三分の二ほどをバスケットと同じ要領で編んで、シート状の部材を作る。屋根を葺くには、この部材を下からずらして重ねながら取り付けていく。屋根上端の棟押さえの素材は島によって多様であるが、小さな簡易小屋にはココヤシの葉が使われることが多い。二枚の長いココヤシの葉を地面に平行に置いて、手際よく編み合わせたものを取り付ける。

トタン屋根が増え、プラスチック製品が入り込んでいる近年の島の暮らしであるが、手軽なバスケタリー素材としてのココヤシの出番はまだ多く、イノベーションも進行中である。

右：乳児用バスケットに寝かされた赤ん坊（撮影：石森秀三、サタワル島、1978年）
左：乳児をバスケットに入れて歩く女性（ングルー環礁、20世紀初頭、出典：Eilers, *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910,* IIB Band 9 Westkarolinen 2. Hamburg: Friederichsem. de Gruyter & Co.）

ココヤシの葉を編み合わせて棟押さえを作る（ヤップ島、1983年）


ココヤシの屋根葺き材を投げ上げて屋根葺きをする（ングルー環礁、1980年）

※写真の一部に裸体表現があるが、当時の文化や社会を伝える貴重な学術資料として掲載する。

シネ倶楽部M

時を越えて語り継がれる砂漠の物語

平野（ひらの） 智佳子（ちかこ）
民博 人類基礎理論研究部

木陰でくつろぐアボリジニ。砂漠でも木陰は涼しい（イマンパ、2014年）

「スウィート・カントリー」

原題：Sweet Country
2017年／オーストラリア／英語、アランタ語／113分／DVDなし
監督：ワーウィック・ソーントン
出演：サム・ニール、ブライアン・ブラウンほか

裁判がおこなわれた都市アリススプリングス（2014年）

話題のアボリジニ映画

二〇一八年、わたしは調査のため、中央オーストラリアに広がる荒涼とした砂漠を訪れていた。ある日、帰宅したアボリジニの家族が「映画館に行ってきた」と言う。「映画館？」。みんなが映画好きであることは知っている。テレビにDVDプレーヤーを接続し、老若男女が映画を楽しむ。だが、わざわざ映画館に赴くなんてめずらしい。「何を観てきたのか？」と尋ねると「アボリジニの映画だ」と言う。その映画は、かつてアボリジニが働いていたアリススプリングス近郊の牧場で撮影され、多くのエキストラが動員されたため、現地の人びとのあいだで話題になっているようだ。映画館はたくさんのアボリジニで埋め尽くされているらしい。わたしも観に行くように勧められたが、あいにく帰国の日が近づいていて、実現しなかった。ところが、帰路、機内映画のなかに思いがけずその作品を発見する。その紹介文には二〇一七年にヴェネツィア国際映画祭審査員特別賞やトロント国際映画祭プラットフォーム賞受賞という記載があり、さらに驚く。ローカルにもグローバルにも高く評価されている本作、そのあらすじを見ていこう。

フロンティア期の中央砂漠

本作は、史実に基づく物語である。舞台はオーストラリアの中央砂漠。厳しい地理的・気候条件から白人入植が遅れた地域だ。時代は一九二〇年代のフロンティア期にまでさかのぼる。アボリジニはその過酷な土地で独自の生活様式を築いていた。その生活知に気づいた開拓民は、アボリジニを雇って入植を進めるようになった。主人公のサムと妻も白人牧師に雇われた。開拓民のなかにはアボリジニに暴力をふるう者もいたが、サムと牧師との関係は良好で、その暮らしは平穏であった。

ところがある日、小作人を求めていた白人農場主がサムと妻を強引に連れ出す。酒に溺れ泥酔する農場主は、サムと妻に乱暴を繰り返す。ある日、あらぬ容疑で銃口を向けられたサムは乱闘の末、農場主を殺害してしまう。

奥地に逃げ込んだサムと妻。そこにあらわれたのが、サムたちを執拗（しつよう）に追跡する白人警官。中央砂漠で繰り広げられる攻防戦は手に汗握る展開だが、砂漠を知り尽くしているサムたちは警官の追跡から逃げ切ることができた。

ところが、サムの妻が体調を崩してしまう。体調不良の妻を気遣うサムは彼女を伴って町の中心部に自ら赴く。開拓民が集う町で開かれる裁判。そこにはサムを執拗に追跡していた警官や裁判の様子を遠巻きに冷やかす聴衆、公正に裁判を進めようとする判事、サムと長く暮らしていた牧師が集まる。今度はサムの罪状をめぐって繰り広げられる攻防戦。その行方は映画で確認していただきたい。

アボリジニの経験を掘り下げる

本作の主題はオーストラリアの植民地主義や人種差別という深刻なテーマだ。ただ、それは白人とアボリジニという単純な二分法には還元されない。アボリジニの出自であるワーウィック・ソーントン監督は、現地の人びとに入念な聞きとりをおこない、その経験を掘り下げるというやり方で、これまで数々のすばらしいアボリジニ映像作品を発表してきた。その手腕は本作でもいかんなく発揮され、中央砂漠におけるアボリジニと入植者の複雑な人間模様が丁寧に描かれている。カウボーイの荒野開拓をアボリジニ目線でとらえなおす本作は、フロンティア時代の「『正義』とは何か」を問う社会派ドラマとしても位置付けられるだろう。

だが、本作の魅力は人種差別の内実に迫ることに留まらない。ここで注目したいのは、映画館が埋まるほど、本作の上映が現地で待たれていたという点だ。本作で印象的なのは、厳しくも美しい砂漠、砂を巻き上げる熱風、そのなかで力強く生きる人や動植物である。あらゆる自然物が絡まり合い、構成されていく世界、彼らが誇るこの「スウィート・カントリー」は、祖先の物語でありながら、ありふれた日常と地平を同じくする現在の物語でもある。時を越えて継承されたこれらの物語は、多くのアボリジニの共感を得ると同時に、世界に届く大きなうねりをも生み出したのである。

獲物を求めて砂漠の岩壁を歩く男性（カルゲラ、2015年）

ことばの迷い道

どう書く？
ウパシ、upas、うぱし、ウパs

志賀 雪湖（しが せつこ）
早稲田大学非常勤講師

今、アイヌ語は、カタカナやローマ字を使って書かれている。外国語の入門書では、発音の目安としてカタカナを使うこともあるが、アイヌ語で使うカタカナは表記法のひとつだ。国立アイヌ民族博物館の『ガイドブック』を見るとカタカナとローマ字の両方が書かれた二重表記の部分もあるが、解説文はカタカナ表記のみだ。

長年、アイヌ民族のアイヌ語教育にもかかわっている言語学者の中川裕（なかがわひろし）氏によれば、アイヌ民族自らがアイヌ語表記に取り組んだ20世紀のテキスト集では、ローマ字表記を用いる人、カタカナ表記を用いる人、二重表記する人とじつに多様であったという。アイヌ語話者であり研究者でもあった萱野茂（かやのしげる）氏は、研究者がローマ字のみで物語を紹介することに疑問を感じ、ローマ字が読めない年寄りにも読めるようにと、1974年の自著『ウエペケレ集大成』（アルドオ）でカタカナ表記を実践した。女性目線で文学を紐（ひも）解いた萩中美枝（はぎなかみえ）氏も同じで、萱野氏らの動きが北海道の二重表記の礎となったといえよう。追って、戦後のアイヌ語研究を牽引（けんいん）してきた田村（たむら）すず子（こ）氏もアイヌ民族の要望により1990年代には、カタカナとの二重表記を取り入れている。

わたしは1984年に初めて物語のテープ起こしと訳つけの仕事をした。道内ではすでに二重表記が一般的であったので、カタカナ表記に苦労した覚えがある。例えばnispa utarのｒを「ル」っぽく発音する方言にあわせ、ニシパ　ウタルと書いたのだが、1994年に出た教科書『アコロ　イタㇰ』（クルーズ）では、ｒを、直前の母音に合わせてラリルレロと書き分ける方針が採用されていて、ニシパ　ウタラと表記されている。

1995年、翌96年に、中川が『アイヌ語千歳方言辞典』（草風館）、萱野が『萱野茂のアイヌ語辞典』（三省堂）、そして田村が『アイヌ語沙流（さる）方言辞典』（草風館）を立て続けに出した。これらは見出し語がローマ字かカタカナかの違いはあるものの、いずれも二重表記を採用している。1987年から2000年代にかけ、㈳北海道ウタリ協会主催のアイヌ語教室が道内十数カ所でおこなわれており、アイヌ民族のアイヌ語学習の気運が高まり、辞書がほしいという声に応えた形であった。

このアイヌ語教室は、今は主催者が代わって受け継がれ、いろいろなアイヌ語教育事業がおこなわれている。東京でも教室が開かれるようになり、聞いた話だが、カタカナを習っていない子がいれば、「ひらがな」でアイヌ語を書くという。アイヌ語指導者育成事業では、将来、指導者となったときのために、どちらでも表記できるようにと勧めている。

さて、表題の単語は「雪」という意味のアイヌ語。必要に応じて使いわけるのだが、最後の「ウパｓ」は、なんとカタカナローマ字まじりだ。これ、いつ使う？

じつはこれ、アイヌ語を教えているアイヌ民族の友人がメールでくれた表記法。半角のカタカナが出ない携帯だったらしく、しかたなくローマ字も使ったとあった。「クンネイワ　ポンノ　ウパｓ　アｓ　ワ　トカｐ　ノｓキ　ワノ　シｒピｒカ　コｒカト　エピッタ　メアン」（朝少し雪が降って正午から天気が良くなったけれど一日中寒かった）という内容だ。ちゃんとわかる！　入力には苦労するけどね。

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2022年6月号

第46巻第6号通巻第537号　2022年6月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　齋藤晃　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC® C013678　VEGETABLE OIL INK　GREEN PRINTING JFPI P-B10282

月刊みんぱく

2022年
6月号

編集後記

日本が単一民族国家でないことは、意外と理解されていない。「日本人」というくくりは、誰もが日本国という国民国家の構成員という意味では間違いではないが、とりわけ「日本文化」を語ろうとするときは大きな誤解がある。なぜなら日本には本州を中心とするヤマトの文化以外にも、アイヌや琉球の固有の言語や文化があるからである。

アフリカ諸国家が独立を果たした1960年、フランスの植民地だったセネガルは複数の民族からなる国として誕生した。初代大統領のレオポルド・セダール・サンゴールが重視したのは、言語政策であった。旧宗主国のフランス語をあえて公用語に制定し、そのほかの複数の言語を母国語とした。ラジオやテレビ放送のニュースは必ずすべての言語で報道される。これによって民族間の衝突を避け、国民国家としての統一を図ろうとしたのである。そして今日まで社会の安定が比較的維持されている。

集団を区別することは差別とは異なる。むしろ同一化することによって生じる「内なる差別」こそが問題である。そうした局面は、われわれの日常にあふれていることを改めて考えさせてくれた特集であった。（三島禎子）

次号の予告 7月号

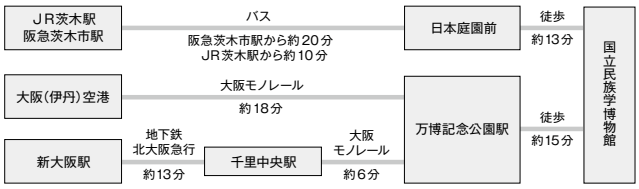
特集「鵜――社会を映し出す鳥」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館友の会機関誌

『季刊民族学』180号　ISBN 978-4-915606-80-9

特集 嗜好品 つくる・映える・やみつきになる

茶や煙草、エナジードリンク、粽など世界にはさまざまな嗜好品があります。わたしたちの心を満たし、暮らしを豊かにするものとは何か、「嗜好品」という視点から考えます。

嗜好品研究からみえるもの
大坪玲子

香港のおいしい ミルクティー
小栗宏太

世界的な飲みものとなることを夢見て
藤田周

大都会東京に映える水煙草
澤井充生

映える刺激
金子修也

エナジードリンクというジレンマ
阿由葉大生

粽が好きな人びと
川瀬由高

檳榔と煙草とパンパイプ
佐本英規

やみつきになる発酵食品
山崎寿美子

ラオスの大麻入りチキンスープのゆくえ
難波美芸

タイ王国にみる覚醒剤と少数民族
二文字屋脩

みんぱくミュージアム・ショップにて販売中
友の会会員価格　2,000 円+税　　一般価格　2,500 円+税

公益財団法人 **千里文化財団**　〒565-8511 吹田市千里万博公園10-1(国立民族学博物館3階)　WEBサイト https://www.senri-f.or.jp/